報　告

# 異文化教育を中心とした英語教育の実践例

大味　潤

# ESL Classroom Activities focusing on Cross-Cultural Training

OOMI, Jun

Abstract

There is no chance to win a game without knowledge of the rules of that game. According to the idea that languages and sports are similar, the Japanese language belongs to the same type of activity as bowling or Japanese archery, and American English to that of basketball or American football. These two types are not only obviously different, but opposite. It is said that people will acquire a target language if they go and live in the country where that language is spoken. However, the real experiences of Japanese immigrants to the U.S. shows this statement is not true. Because those immigrants lack knowledge of the cultural norms of the country they fail to communicate properly, and as a result, they find it hard to acquire the language.

The author proposes a teaching method to improve his Japanese students' communication skills by focusing on the cultural norms of the American English language. He believes that, just like sets of standard movements in martial arts, students can learn the real basics of language communication, as well as the ways to apply that knowledge later for more advanced movements.

After the completion of the course work, his students demonstrated better performance and gave positive feedback about the instructor and the curriculum. Furthermore, they showed more interest in foreign languages and people at the end.

**邦文抄録**

ルールが分からないゲームで、ルールを熟知した相手に勝つのは恐らく不可能である。言語の違いはスポーツの違いと同類だとする考え方によれば、日本語は弓道やボーリングの種類に属し、アメリカ英語はバスケットボールやアメリカンフットボールの類に近いと言う。これではルールは正反対に近い。一方で英語を習得するには実際に英語圏に行った方がいいとしばしば言われるが、日系移民の現実を見れば必ずしもそうではない。その国の文化規範を欠いている為、コミュニケーションで失敗を繰り返しているからである。

この授業で提唱するのは、異文化間要素を主眼にして日本人の英語でのコミュニケーション能力を向上させる試みである。丁度武道の型の様にその世界で基本となるべきものを踏襲することにより、語学の習得も効率的に出来るのではないかという考え方が元になっている。

その結果、授業の達成目標である英語でのコミュニケーション能力については、ほとんどの学生が自分自身の英語の意識が変わったと述べており、教室活動を肯定的に捉えていたようである。興味深いのは学生の中で、単に英語や外国人への苦手意識が消えただけでなく、外国人や外国文化への興味が出てきたことであった。

**キーワード**

異文化教育（Cross-Cultural Education）
英語教育（Teaching English as a Second Language）
第２言語習得（Second Language Acquisition）
コミュニケーション能力（Communicative Competence）

## 序論

文法や英文和訳を中心とした受験英語や学校英語の弊害が説かれ、会話やコミュニケーションの為の英語教育の必要性が叫ばれて久しいが、現状は英検や受験英語からTOEICへとその目標が変わったものの、テスト偏重そのものには何ら変わりはない。新しく刷新されたカリキュラムの元でも日本人学生の英語能力が顕著に変わった形跡は特になく、寧ろ今まで高得点をマークしていた文法や読解問題での後退が目立ってきたという（鳥飼2002）。

時代遅れだと非難されることの多い文法重視・翻訳中心の語学学習が非難され、実に様々な教授法が提案され実施されてきて久しいが、果たして日本人の英語能力、いや英語教育のレベルは、少しは上がったのだろうか。これについて鳥飼（1996）は、英語教育の専門家の代表作やその意見に触れながら、「その他にも、こうすれば英語はできるようになる、という類の本は数知れない。にもかかわらず、日本人の英語がこのところ目を見張るほど上達した、という話はついぞ聞かない（はじめに p. iv）。」と述べている。

ルールが分からないゲームで、ルールを熟知した相手に勝つのは恐らく不可能であろう。ルールを知らなければ点の取り方も、ルールに従っているか違反をしているかも、点を取ったことや取られたことすら分からず、さらにはいつ試合が始まりいつ終わったかも恐らく気が付かないだろうからである。

言語の違いはスポーツの違いと同類だとする考え方がある。この考え方では日本語は弓道やボーリングの種類に属し、アメリカ英語はバスケットボールやアメリカンフットボールの類に近いと言う。であるならば、日本人の英語コミュニケーションは、丁度「英語」というスポーツのルールを知らないまま試合に出てボロ負けした選手に近い。何故負けたのかも知らず、試合が終わったことにすら気が付かないだけでなく、本当の問題は日本人が「英語」のルールを知らないことに、当の日本人チームもアメリカ人チームも、審判もそして観客すらも気が付かないことにある（Yamada、1997）。

では具体的に「アメリカ英語」というスポーツに参加する時、日本人はどのようなルールに躓いているのだろうか。例えば書き言葉や話の展開の違いについて、鳥飼（2002）はTOEFLを例に挙げてこう語っている。「TOE-



本論文冒頭

FLエッセイ・テスト（ライティング）では、北米の大学で通用するような英語の論理構成が判定基準になっている。これを、異なる論理思考形態や文章作法を有する文化に対するアメリカン・スタンダードのおしつけと見る向きもある。言語学者のカプラン（R.Kaplan）が主張するように、文化によって直線型思考パターンや渦巻き型思考パターンがあるとするなら、渦巻き型思考とされる日本人学習者は、直線型思考を求められるエッセイ・テストでは苦労することになる。これは言語能力以前の文化の問題に帰することである。ただTOEFL の趣旨は、あくまで北米の大学に留学するための英語力を判定することにあるので、アメリカン・スタンダードで測ることはやむをえないともいえる。(p.78)」。つまりアメリカ人ネイティブスピーカーが判定する場合、かくも異なる文化背景の日本人学習者の英語力が、果たして公平に測られているかは疑問だと言う。

尤も文法力や語彙力がそれをカバーすると考える意見もあるが、それに対して鳥飼は「英語では、大事なことをまず最初に書く。その後、その点について敷衍し議論を展開し細部を説明し、直線的な論理を積み重ねて結論まで持ってくる。これを知らないで日本語的発想法で英文を書くと、相手に理解してもらえない危険がある。これも文化の違いになるのだが、英語の論理が一直線だとすると、日本人の思考方法はらせん状だと言われる。（中略）日本人の書いた英文を読むと、文法的には問題ないし単語もきちんと調べて書いているのに、欧米人から『結局、何が言いたいのか、よくわからない』と言われる。書いても話しても、日本人はなかなか本論に入らないので、重要なことは最初にくる、と思っている欧米人は『いったい、これは何なのだ？』とイライラしてしまう。(鳥飼1996：p.106-107)」と反論する。ここで問題なのは、所謂文法力や英文和訳能力、ひいては単語力とは違う何かがそこに存在しているという事実であり、例えばアメリカ人とコミュニケーションを図る場合、アメリカ人のルールに則って英語の試合に参加しなければ、日本人にとっては試合そのものが不成立となる可能性が高いということである。

しかしながらお互いの価値観が違うことは、語学教育で本当に認識されているだろうか。「語り手の文化背景が違えば、語る内容ばかりでなく語り方そのものも違う。(ニスベット2003)」。このように書き言葉ではしばしば語られる東西文化であれば、話し方の思考型の区別があって当然であろう。また、賀川（2005）は英文の基本構成が、日本文化で見られる起承転結ではなく、「My pointの理論」すなわち、①ポイント、②理由、③具体例、④結論、の4要素であると述べ、次のようにまとめている。「欧米人、なかでも地位の高い人は、部下のプレゼンテーションを聞くにあたって、『理由』から『具体例』にいたる部分の理論の整合性をチェックする質問をよくします。つまり、『For example, …』で語られる具体例が、ちゃんとその前の『The reason is…』をサポートしているか、論理的にリンクしているかをチェックするのです(p.154)。」

## 1. 背景

ではどうしてこの異文化教育のアプローチを取り入れた授業をするに至ったのか、どういう背景でそこに至ったのか、その経緯について以下述べていく。

### 1.1. 留学生と移民の語学力

英語を習得するにはアメリカやイギリスの

ように、実際に英語が話されている国に行った方がいいとしばしば言われる。「英語漬けになれば英語が習得出来る」という考え方がそこにあると言われるが、では現地に行って英語は習得出来るのだろうか。

日系アメリカ移民と呼ばれる人々がいる。国籍をアメリカに移し、生涯をアメリカで送ると決めた人々である。当然24時間英語漬けになっている人達だが、英語力は必ずしも高くないという。実際にネイティブスピーカーと同レベルになるのは、移民2世になってからと指摘されているが、それでも異文化適応で何かしらのハンディキャップを負っている場合が多いという（Takaki、1989）。であれば、語学留学の学生や現地派遣される企業法人の会社員が、短期間で語学力を向上させるのが難しいと考えるのが妥当であろう。

一方で欧州を文化基盤とした者と、アジア大陸を基盤にした者との溶け込み方の差も指摘されている。すなわちヨーロッパからの留学生や駐在員の方が、日本を含めたアジア人よりも、早く且つ適切に言語を使いこなすようになり、また現地の文化に溶け込んでいるというのである。TOEICやTOEFLのスコアにほとんど差がない場合でも、その差は歴然としているケースが多い。では何故テスト英語は実際のコミュニケーション能力と比例していないのであろうか。

### 1.2.　異文化摩擦

そこで考えたいのが言葉以外の壁、すなわち異文化的要素である。先に考え方の違いと表現したが、行動パターンの違い、ひいては知覚や感覚の違いとも考えられる。多文化社会では「There is no such a thing as common sense.（世界に常識―共通する感覚―などというものはない）」と言われるが、日本人の多くが暗黙の了解としている無言のコミュニケーションは、世界的に見れば例外と言えるだろう。文化は言葉で説明されなければ理解されることはなく、そして継承されることもないというのが定説だからである。

### 1.3.　語学教育とは

ではTOEICやTOEFLに代表される語学テストは何を見ているのか。例えば鳥飼（2002）は英検、TOEFL、TOEICがどの程度コミュニケーション能力を測っているかについて概説した後、その問題点として次のように語っている。「より根源的な疑問としてあげられるのは、3試験とも、個人が自主的に発言する能力を判定する試験ではないことである。(p.79)」。個人が自主的に発言する能力が測定されていないのならば、日本人が実際にコミュニケーションを図る際に、テストのスコアと比べて見劣りがしても当然であろう。これがコミュニケーションの為の英語教育を行う際に、問題となるのではないか。

## 2. 実践「何をどう教えたのか。具体的に何をどうしたのか。」

この授業で提唱するのは、学生にその日本人性や日本文化そのものに変容を迫るのではなく、英語を話す時だけその考え方をアメリカ文化に適応出来ないかという試みである。考え方は文化に根付いたものであるから、個々人の考え方など変えることは出来るわけはないという意見もあるだろう。しかし、日本人は日本語の習得を通して相手に合わせながら、態度のみならず話し方や文体までも変えている。これは状況が変われば自分の役割やあり方も変わるという日本文化の特性でもある（ニスベット2003）。であれば、ここにさ



本論文冒頭

らに一つ加えることは日本人にとってはあまり困難なことではない。「英語」というもう一つの話し方を加えるに過ぎないからである。

### 2.1. 理論的背景

教育の原点を指示した哲学者にパウロ・フレイレがいる。教育とは自分の世界を表現するものであり、世界に積極的に関わる為に行うものであり、それ故「死んだ」知識の押し付けは決してしてはならないという哲学を基に、南米の識字運動を展開し世界の注目を集めた（フレイレ、1979）。翻って日本の英語教育はどうであろうか。徒に文法の知識やテストの高得点という価値観を押し付けてはいないだろうか。また学生は英語の教育を通して、自分の世界を表現出来るようになっているのであろうか。

コミュニケーションとは相手に何かを伝えるものであり、自分の気持ちや日常の出来事を相手に伝えるという基本的な欲求を満たすものである。ならば、英語教育も学生が英語を使って相手に自分の気持ちやメッセージを伝えることが出来るようにならなければいけないであろう。

しかしながらコミュニケーションの在り方とは万国共通のものではない。そこには各言語に結びついた実に様々な文化が展開されている。そしてその言語に内包された文化が、コミュニケーションの在り方を決しているのだが、内包されているが故にそれが果たしてどのようなルールに基づいているのか気が付かれることは少ない。ある文化は異文化と接して初めてその規範を露呈することが多く、また同時に文化は言語化されて初めて継承されていくからである（ホール、1970）。

ここで仮定したのは、言語によって決まった話の運びがあるのではないかということである。これは丁度武道の型の様に決まったパターンが存在するのではないか、すなわちその世界で基本となるべきものがあるのではないかということであり、その基本を踏襲すれば語学の習得も効率的に出来るのではないかということである。

### 2.2. 日本語教育での実践

ここで当教員が米国滞在中にアメリカ人を対象として行った日本語教育について簡単に紹介しておく。短期習得を常識とする米国での学習者が必要としていたものは、何よりも即効性のある教育内容であり、教わった内容そのままに日本人とコミュニケーションを取るためのものであった。その為、簡単な会話を練習させながら、日本文化の規範を説明することで、異文化適応を速めることにした。具体的な日米異文化摩擦の導入については、実践例が少ないのが現状であったが、この際には日本人から見たアメリカ人の異文化摩擦の具体例のデータがあった為（Omi、2003）、そこから10要素を引用し教授項目としていた。参考までに挙げておくと、基本的社会距離に当たる3要素である「視線、お辞儀、距離」、上下関係がある場合の付随要素である「姿勢、順番、持ちもの、スペース」、そして米語と対照を成す会話の不文律である「沈黙、あいづち、和」の計10項目である。本来それぞれに説明が必要であるが、今回は省略する。詳細は論文を参照して頂きたい。

### 2.3. 英語教育への応用の実際

上述の日本語教育同様に今回の英語の授業で目指したのは、すぐに体感出来る実践的教育内容であったので、学生の実生活に英語教

育がどこまで結びつけられるかを念頭において教材を作成した。例えて言うと、携帯電話の取扱説明書を延々と解説するのではなく、実際に携帯を手にしての電話の発信、あるいはメールの送信やカメラ機能を使いこなす為の内容にするということである。学生に習得させたいのは、実際に人と人とが直に向き合わないと身に付かないコミュニケーションの形態であり、口から出るだけの言語情報のみならず、英語を話す際に必須となる態度、習慣、礼儀作法等々の話の運び方であった。

今回紹介するのは2008年度に総合政策学部の2年生を対象に行った必修英語2コマ分（同一曜日の1時限目と2時限目）の授業である。コースワークとしては読解や聞き取りも課しているが、当クラスでは教科書は主に課題としてある為、授業内ではほとんど触れることはなかったので、今回は割愛しておく。

授業は週1回で1学期全14回なので、通年で28回。履修者は編入や再履修による3、4年生数名の例外を除けば2年生ばかりであり、履修人数は登録上それぞれ12名ほどであったが、1時限という時間帯が災いしたのか、それとも下級生とコミュニケーションの練習をするのを避けたかったのか、実際に最後まで来ていたのは全員2年生で各9名ずつ（女子学生は各3名ずつ）であった。1コマ90分の時間配分は大体次の通りである。

| | |
|---|---|
| 単語・聴解テスト： | 10分 |
| 会話その1（2人組）： | 20分 |
| 英語の諺・格言： | 10分 |
| 会話その2（2人組）： | 20分 |
| 英単語キーワード： | 10分 |
| 会話その3（3人組）： | 20分 |

簡略して授業の流れを説明すると、最初の単語テストで宿題に関係した語彙力の強化を行い、同時に出席を取る（これは遅刻防止も兼ねている）。さらに聞き取りのテストを行うことで、頭や耳を英語に慣らしておく意図もある。本クラスでは会話の練習が中心になっているが、それだけでは単調になるので、諺を使って英語を読み込む時間を取ったり、各回1つ英単語のキーワードを深く掘り下げたりして変化を加えている。

### 2.3.1. 異文化項目

当授業で会話練習の中核となる異文化要素であるが、2008年度は以下の通りであり、これは授業で実際に導入した順序でもある。尚、期末試験の際にはこの項目に従って12点満点で採点している。

| | |
|---|---|
| 基本事項： | ①Eye-Contact（視線） |
| | ②Shake-Hands（握手） |
| | ③Distance（距離） |
| | ④Smile（スマイル） |
| 見え方： | ⑤Posture（姿勢：上半身） |
| | ⑥Stance（姿勢：下半身） |
| | ⑦Gestures（身振り手振り） |
| | ⑧Emotion（感情表現） |
| 聞こえ方： | ⑨Overlap（話し出しの間） |
| | ⑩Gap-Fillers（間の埋め方） |
| | ⑪Loudness（声の大きさ） |
| | ⑫Rhythm（リズム） |

では次に、各異文化項目の内容とその注意点を説明する。

#### 2.3.1.1. 基本作法

①Eye-Contact（視線）：視線を合わせたまま会話をすること。日本人のアイコンタクトは相手の意思確認の為に時々見るだけだが、



本論文冒頭

アメリカ人の場合は目を逸らしたら会話は終わるものと考えよ。但し日本人のように心の中を読む為ではないので、必ずしも相手の目の中を見入る必要はない。相手が眼鏡をしているとイメージすると、眼鏡の淵に当たる目の周りを見ていればよいことになる。

②Shake-Hands（握手）：手のひらを合わせてしっかりと握る。ただ手を握るだけでなく、握ったら2回振るのが原則。男性同士は握力計を握る如くガッチリと、また女性同士でもしっかりと握る。そして男女の場合は女性から先に手を伸ばし、ソフトに握手をする。日本人がよくやるフワッと握る握手、Dead Fish（死んだ魚）は減点対象。日本人のお辞儀に当たる西欧の握手では、友情や信頼など人間関係はこの接触度で全てが決まると考えて良い。また原則的に座ったままで握手はしない。相手の性別や年齢に拘わらず、相手が立っていたら自分も必ず立ちあがること。

③Distance（距離）：片手で握手をする際にも、両手で握手出来る距離を取り、握手をした距離のままで会話をする。日本人のように握手の時だけ近づき、握手が終わったら後退するのは厳禁。相手の背が高くても低くても、この握手の距離は変えないこと。2人の時だけでなく、3人の場合でもこの原則をあてはめる。

④Smile（スマイル）：前歯のみならず、奥歯まで見せるように笑顔を向けること。Oriental Smile（オリエンタルスマイル）と呼ばれる、歯を見せない笑顔ではスマイルとは認識されず、Giggle（ひきつけ笑い）として印象が悪い。丁度、スマイル検知機能を持ったカメラが作動するように表情を大きく作ること。日本人の場合は、口を大きくあけるのは下品とされるが、アメリカでは丁度逆に当たる。但しあくまで一時の仮面として機能すればいいので、一瞬の作り笑いで良い。マクドナルド等、アメリカ式の接客で見られるスマイルを真似ると良い。

#### 2.3.1.2. 外見（考え方）

⑤Posture（姿勢：上半身）：上半身の姿勢をまっすぐに保ち、堂々と見せる。お辞儀を基本作法とする日本人は概して猫背気味で第1印象が悪く、これが欧米人から見ると信頼に足る相手に見えない場合がある。謙虚さは決して好印象を与える訳ではない。座っても立ってもまっすぐの姿勢が基本。やや胸を張り、肩も後ろに引く姿勢を取ること。自分の全てを見せ、且つ自信有り気に見せるのが肝要。

⑥Stance（姿勢：下半身）：両足でまっすぐしっかりと立つ。片足に重心をかけたり、壁にもたれかかったり、足を動かしたりと落ち着きのないような立ち方をしないこと。上半身同様、堂々とした印象でいること。立っている場所が自分の陣地の如く、どっしりとしていると印象が良い。

⑦Gestures（手ぶり）：両手、両腕を肩より上に挙げて、大きな動作で話を誇張し分かり易く伝えるようにする。コメディアンやアニメのような大きな動作が参考になる。言語メッセージを強調・補強する為のものであるので、話している内容と同じものを表現する。日本人は微妙且つ繊細なメッセージを良しとする傾向があるが、小さな動作や分かりにくいものは、無きものか不審なものと見なされる。まして言語メッセージと異なるメッセージをジェスチャーで表現するのは、矛盾したメッセージを相手に送らないというアメリカ文化の原則に反し、相手から不信感を買うだけなので厳禁。

⑧Emotion（感情表現）：感情表現は誰でも分かるような顔の表情で、喜怒哀楽をはっきりと表すこと。能面のような僅かな表情の変

化で伝えられる日本人は、そもそも表情に乏しいと言われる。しかし英語、特に米語圏ではそのような微細な表情の変化は通じにくく、そもそも気付いてすらもらえない可能性が高い。無論、伝わらなければメッセージにはならない。

#### 2.3.1.3. 聞こえ方

⑨Overlap（話し出しの間）：相手の話が終わる前に話しを始めること。日本語と違い英語の場合はその構造上、話の流れが見え易く最後まで聞く必要が少ない。まして全員の意見を均等に聞こうとする日本文化と違い、意見は自分から相手を遮ってでも言うものとするアメリカ文化では、順番は決して回ってこないと考えた方がいい。相手の話を最後まで聞くことより、間が開くことを極力避けること。「ひとつには、『間のとりかた』の文化的違いがある。アメリカ人は沈黙が苦手である。シーンとなるとあわてて誰かが何かを言う。ひっきりなしに誰かがしゃべっているのが普通の状態である。誰かがしゃべっているのを、うまくさえぎって話しに加わる、自分の話しをする、ということにはたけていても、複数の人間がいるところで誰も何も言わない、という沈黙は耐えられないらしい。そこへいくと、日本人はむしろ、会話の順番とりは下手でなかなか口をはさめないが、沈黙がこわい、ということはない。（鳥飼1996：p.19-20）」沈黙が心地よい日本人とは違い、沈黙とはコミュニケーションの失敗だとみなされる。

⑩Gap-Fillers（間の埋め方）：間を開けない。上記のように間が開いたら会話が失敗に終わることを意味する。もし相手に何か聞かれて、すぐに返答が出来ない時には、つなぎの言葉を入れて間を空けないようにする。また逆に相手からの反応が3秒以内にない場合も同じ対応をする。この際は先に述べた内容をそのまま繰り返したり、言い換えたりする場合が多い。一旦会話が始まったら、最優先事項として空白の時間を作らないことである。

⑪Loudness（声の大きさ）：英語、特に米語は比較的音量の大きな言語である。日本語は大声で話す言語ではないが、アメリカ英語は物事をはっきり言う風潮があるので、丁度逆に当たる。音量の比較的小さな日本語の会話と比べて、約2、3倍の音量でメッセージを発信しなければ、そのメッセージは受信されない。発音に自信がなくても、はっきりと話すように心掛ければ、相手は耳を傾け理解しようとしてくれる。何か伝えようとする意思が、この音量で測られていると考えよう。

⑫Rhythm（リズム）：喩えカタカナ発音でも英語の抑揚、すなわち強弱のある発音であれば英語らしく聞こえる。逆に抑揚の無い棒読みでは、ネイティブスピーカーと同様の発音をしても英語としては聞いてもらえない。英語として知覚されなければ、英語を話せないと思われ無視される場合もある。アメリカでは英語を話せないものは、一人前の人間として扱われないか、庇護を受けるべき哀れな存在として扱われることを理解しておこう。

#### 2.3.2.1. 教材内容その１

では、具体的に今年度の教材内容をいくつか紹介していきたい。まず例文1は4月の最初の授業で学生が初めて取り組む会話の内容である。会話の通し番号では1番になる（ちなみにこれが1年後の学期末試験までに72番までになる）。

（例文1）

A1 ： Hello!

B1 ： Hi there!



本論文冒頭

A2 ： I'm _____. Call me _____.
B2 ： I'm_____. Call me _____.
A3 ： Nice to meet you, _____ （B）！
B3 ： Nice meeting you,_____ （A）！

授業の手順としては、まずは全体で発音練習をして音を耳から入れる。次に教員から訳とその状況設定を説明する。この間、約5分。次に教員が実際に組むペアを発表する。ちなみにこのペアは毎回相手を変えている。その後、学生同士はお互いに歩み寄って作業を開始する。作業内容を具体的に言うと、まずは自分の担当をAかBか決め、下線部分にはそれぞれ英語の順序、すなわち名性の順の自分のフルネーム、英語でのニックネーム、そして相手のニックネームを入れて暗記する。内容はお互いの自己紹介をするだけの単純なものなので、誰でも5分ほどで暗記出来る。この時点ではあまりに簡単なので、学生達は一体何をする授業なのか訝ることが多い。

次にこの授業の趣旨である3つの基本事項、①Eye-Contact（視線）、②Shake-Hands（握手）、③Distance（距離）を導入すると、難易度は一気に上がりクラス全体がちょっとしたパニックになる。さらには10分後に皆の前でそれぞれ発表してもらう旨を伝えると、初めて会う同級生とのぎこちない雰囲気の中でも、恥をかきたくないという心理的プレッシャーが相手との共同作業を真剣なものにさせ、アクティビティーが活発になる。クラス全体が緊張する中、各組の発表が始まり、計約20分でこの会話の練習は終了となる。

先述したように、これらの異文化項目は日本人であれば誰でも苦手なものばかりなので、このように誰にとっても未知の課題に取り組むことにより、入学までのテスト英語の成績に関わらず、この初日にクラスメート全員が同一のスタートラインに立つことになる。そしてこれが後にクラス全体の一体感を生み出し、楽しい授業に変えていく為の大事な要因になる。

#### 2.3.2.2. 教材内容その2

次に紹介する例文2は今年度では7月の初め、12回目の授業で行った会話で、通し番号では35番目に当たるものである。

（例文2）
A1 ： Hello! Is there anything I can do for you?
B1 ： Yes, please. I'm heading for "Hakone" but I can't find it.
A2 ： Oh, you are at a wrong place. Take the Odakyu line.
B2 ： Excuse me, what did you say? "The Odakyu line"？
A3 ： Yes, it's a private line, not JR. Go downstairs and turn right.
B3 ： Oh, I see. Thank you very much. You helped me a lot.
A4 ： That's all right. Enjoy the hot spring!
B4 ： Oh, thank you. Have a great day! Goodbye now!

御覧の通り、駅での道案内でJR新宿駅から小田急線への乗り換えという内容である。今回は駅での道案内であるが、他にも路上での道案内のパターンもある。困っている外国人を見て何とかしてあげたいとは思うものの、何て言っていいのか分からない、またどうしていいのか分からない経験は、英語の苦手な学生でも日常的にあるようで、道案内の際の諸注意と共にこのような会話を練習させていると、将来の必要性を感じるのかどのクラスでも熱心にやっている。この段階では行数はそれぞれ4行になり、1行に2、3文が挿



本論文冒頭

入され、文自体も複雑になっている。しかしこの頃には学生は既に要領を掴んでいるので、文を暗記して実際に演じるまで20分と掛からなくなっている。

ここでの導入項目は、⑦Gestures（身振り手振り）で、言葉が多少不自由で伝えにくくても、目的の場所や曲がる方向を大きく腕で指示せば、相手に簡単に伝わることを実感させる。ちなみにこれが後述するように「先生、英語が通じた」と嬉しそうに学生が報告してくるパターンの筆頭格でもある。

#### 2.3.2.3. 教材内容その３

次に紹介するのは、渡米してきた学生から要望があって作成したコーヒー店での注文である。世界規模で展開するチェーン店であっても、文化による違いは存在するので、身近な話題ながら必ずしも難易度は低くない。本年度は10月の教材で、通し番号では47番にあたる。

（例文3）

A1：Next, hello! What would you like today?
B1：Well, I'd like "_____（品名）."
A2："_____（品名）"？OK, which size?
B2：Let's see…, make it _____（サイズ）, please.
A3：Sure. Would you like whipped cream?
B3：Yes, please. / Well, just a little. / No, thanks!
A4：All right. That would be _____（金額）.
B4：_____（金額）? Hold on …here you go!
A5：OK, thanks. I'll be right with you!
B5：All right. Thank you very much!
品名：Café Mocha, Espresso Macchiato, Cinnamon Dolce Latte
サイズ：short：3.35, tall：3.75, grande：4.25, venti：4.70

北米のスターバックスコーヒーを想定して、学生が渡航先できちんと注文出来る様に、簡単なものから難しいものまで3段階用意してあるのだが、これは一番難易度が高い。通常の注文内容に加えて、エスプレッソを注文する為にホイップクリームの量まで自分で決めなくてはならない状況になっているからである。御覧の通り、品名やサイズも各自が自分で注文しそうなもので練習するように指示している。その為、発表内容が微妙に異なり、聞いている方も飽きが来ないという利点もある。またこの場面では、現金の受け渡しの際に必要になる、値段の聞き取りや金銭の受け渡しの表現、さらには足し算でお釣りを渡すアメリカ文化にも触れている。

尚、このレベルになると各会話の発表に制限時間を設けてあるが、これは特にファーストフード系列の為、実践的にかなり早口で練習させている。ちなみにこの制限時間は25秒以内である。元々は実際の状況に合わせる為の時間制限だったが、学生のダラケ防止にも役立っていたようである。

#### 2.3.2.4. 教材内容その４

では最後に、このように進めた授業で、学生が学期末にどのくらいの内容をこなすのか見て頂きたい。次の例文4は12月の初め、25回目の授業に行ったもので、延べ69番目にあたる。

（例文4）

A1：Hi, what's up today, _____（B）?
B1：Nothing. How about you,_____（C）?
C1：I'm fine! And you, _____（A）?



本論文冒頭

A2：I'm okay. Hey guys, did you see *Chris* today?

C2：*Chris*? No, I didn't. S/he is taking another class.

B2：I'm taking the same class, but s/he was not there.

A3：Really? I mailed her/him, but s/he didn't reply to me yet.

B3：Oh, yeah? S/he didn't take my call this morning either.

C3：S/he can't miss next class, so I think s/he's coming anyway.

A4：Then, could you ask her/him to share lunch with us today?

C4：Sure, I will. Maybe s/he left her/his cell phone at home.

B4：I guess you're right. S/he does that once in a while.

A5：OK, then! I will see you later!

B5：All ready! Talk to you later!

C5：I'll meet you at the cafeteria!

All：Bye! / Chao! / Adios!

上述の通り、各授業の最後は毎回このような3人組の会話であるが、今回は3人が学校で出会って、当日まだ見かけてないクリス（男女共通の名前なので性別を決めるよう指示してある）という名の学生の話をしているという設定である。この段階では各担当する分量が6行になり、文も会話そのものの構成もかなり複雑になっている。4月最初に与えられた英文とは内容も分量も全く異なっているが、学生達はここでも20分くらいの持ち時間で役割分担を決め、各パートを暗記し、読み合わせ演じ合わせて、クラスの前で発表するというチームワークを見事にこなせるようになっているのである。

ここで強調しておきたいが、当授業は暗記科目ではない。内容が大体合致していれば、セリフや表現が多少変わっても一向に構わないと指示してある。暗記だけでは英語は使えるようにならないし応用も利かない。大学での授業科目という貴重な時間を費やす意味もないし、何より学生が必要性を感じないので乗って来ない。暗記するのはあくまで最低条件で、大事なのはそれをベースとして人前でどこまで使えるようになるか、また実際にそのような場面に遭遇した時に何か対処が出来るかどうかである。それが結果として、英語を学ぶ意味や人との接し方を学ぶ意味に繋がっていると繰り返し説明をしている。

## 3. 結果

それでは以上述べてきたような授業を1年間行って、その結果学生はどう変わって、またそこから何が分かったのかについて述べていきたい。

### 3.1. 学生から:

学生の反応であるが、学期末に実施しているアンケートがあるので、そこから拾い上げてみたい（誤字以外はほぼ原文のまま）。尚、これは大学が実施しているものではなく、当教員がこのクラスの内容に合わせて作成したもので、学期の途中と期末試験後、1学期2回、年4回実施している。質問項目は授業を総合的に評価してもらう為、A4用紙両面に質問が多岐に渡って設けられているが、今回は2項目だけに限定して紹介する。ここでは年度末、すなわち1月の期末試験後に実施したものである。

### 3.1.1. 「自分自身の（英語の）変化について」

「原宿で中国人っぽい人に英語で道案内で話しかけられて、竹下のダイソーを聞かれたので何とか授業でやったみたいに教えられたので良かった。」「英語大っキライがニガテになりました。少しずつだけど英語だけでなく、他の外国語にも興味を持ってきた。」「少し自信がついたかも。」「今までは教科書通りの会話をただ暗記するだけだったけど、この授業を受けてから会話以外のこと（SmileやGestureなど）を学べて勉強になった。暗記するのが大変だったけど…。」「外国の方に道案内等で話しかけられたいという気持ちが出てきた。」「話す距離や目を見て話すようになった。」「英語に興味を持てるようになった」「特に変わらない」（以上1時限目）「好きになったことは間違いないし、話せると格好良いし、音楽で洋楽を聴くようになった。」「外で外国人がいた時、話を聞いてみようとするようになった。」「苦手意識が少しなくなった。」「英語はなんとなくこれからもなにかしら続けたいと思う。」「今までは会話よりも文法をメインでやっていて、話すことはほとんどなかったのですが、実際に話してみて、会話ができないと、英語を勉強する意味はないなと思うようになりました。」「英語が聞き取りやすくなった。」（以上2時限目）

### 3.1.2. 「このクラスで学んだこと」：

「英会話の楽しさ」「続けること」「英語は楽しい」「英会話でのコミュニケーション」「話す時のルールやマナー」「外国人の会話の特徴」「外国人との接し方」「人は変わる」「アメリカの色々なことや英会話についての知識」（以上1時限目）「英語のコミュニケーションの楽しさや外国の文化について得したかも。」「コミュニケーション。人生。」「学んだことというか、人との会話が少し好きになった。」「チームワーク」「外国人とのコミュニケーションの取り方」「英会話力。コミュニケーション力。」「会話。コミュニケーション。」（以上2時限目）

### 3.1.3. まとめ

概して授業の達成目標である英語でのコミュニケーション能力についての言及が多く、実際に使う練習を楽しんでいたことが伺える。数名の例外を除けば、ほとんどがこの1年間で自分自身の英語の意識が変わったと述べており、また教室活動を肯定的に捉えていたようである。興味深いのは学生の中で、単に英語や外国人への苦手意識が消えただけでなく、外国人や外国文化への興味が出てきたことであった。

## 3.2. 教員側の感想

この数年、日本人は変わったと言われることがある。世代間の差が大きくなり、日本文化が変質してしまっているという意見も耳にする。しかし少なくともアメリカ文化と比較した場合、学生達は紛れもない日本文化の継承者である。上記の異文化要素をすぐにこなせる学生は皆無に近い。思い遣りの文化、謙虚さの文化と呼ばれる日本文化は、世代を超えて受け継がれているようである。

最近の若者は人間関係が希薄になってきたと指摘されることもあるが、機会があれば学生は友達の和をどんどん広げていくのもまた事実である。座学であれば隣に座っている学生が誰であるか気にもしないであろうが、こ



本論文冒頭

のクラスのようなアクティビティーではペアワークや3人組での作業を通して、彼らはこの1年どんどん変わっていった。そして最後には見事なチームワークを作り出し、授業そのものを楽しいものに変えてくれた。教材を準備し教える側のこちらとしては大変嬉しいものであり、学生達の協力に感謝したいと思う。

### 3.3. 教育効果

先に日本文化を継承している学生達の姿を述べたが、同時に文化的な価値や位置づけを明確にすることによって、特に苦も無く2、3週間で変容していく姿もまた事実である。文化は言語化されて初めて理解されていくことが、この異文化間教育的アプローチによってその可能性がはっきり示されたと言えよう。そしてまた学生が英語でのコミュニケーションが苦手でなくなったり、語学学習や外国人に積極性が出たりしたことを見ると、英語教育の新しい可能性を示せたと思うのである。

最後にこの授業の思わぬ副産物になった学生の仲間意識について言及しておきたい。それはクラスメートという存在が、単に必修授業で顔を合わせるだけの存在ではなく、1年間同じ課題をこなしその発表を見ることで、例え成功しても失敗しても、許し合い笑い合う貴重な存在になっていったことである。発表が得意な者、苦手な者、拍手を受ける者、からかわれる者、それぞれがなくてはならない存在になっていった。この授業が彼らの学生生活の楽しい思い出になってゆくかもしれないと想像すると、こちらとしても教師冥利に尽きる感がある。

## 結論

以上異文化的なアプローチの英語教育の実践報告として授業の一例を紹介した。ここでの一番の問題点は、基本的な事項ながら包括的に取り上げた為か、研究分野としてはこのようなアプローチにも研究分野にも名称すら付いていないことである。

しかしながら一概に非言語的なコミュニケーションと呼ぶことにしても、ここで取り上げたのは日本人がアメリカ文化を学ぶ際にはあまりに基本的なものである。言語教育の目的がコミュニケーション、特に英語ネイティブスピーカーとのコミュニケーションであるなら、以上に挙げたような研究分野が一個の領域として認知されてしかるべきであろうと考える。

最後になるが、以上のようなアプローチがタイプの違う英語、すなわちイギリス英語やオーストラリア英語、ひいては他の言語の教授法として確立されてきてもいいのではないかと思う。しかしこのような授業に適した教科書や教材、そしてさらなる多角的な教授法の登場を期待しながらも、同時にまた研究者としての自分を叱責している次第でもある。

参考文献

エドワード・ホール、「かくれた次元」、みすず書房、日高 敏隆、佐藤 信行（翻訳）、2000。

賀川洋、「ビジネスバトル：日本人VS外国人 異文化摩擦28番勝負」、講談社バイリンガルブックス、2001。

パウロ・フレイレ、「被抑圧者の教育学」、A.A.LA教育・文化叢書、小沢 有作（翻訳）、

1979。
鳥飼 玖美子、「TOEFL・TOEICと日本人の英語力-資格主義から実力主義へ」、講談社現代新書、2002。
鳥飼 玖美子、「異文化をこえる英語-日本人はなぜ話せないか」、丸善ライブラリー、1996。
リチャード・ニスベット、「木を見る西洋人森を見る東洋人」、村本由紀子訳、ダイヤモンド社、2004。
Omi, Jun, “Japanese Post-secondary ESL Students’ Perspectives on Communicative Competence in the Cultural Contexts of the United States”, University of San Francisco, CA, 2003.
Takaki, Ronald, “Strangers from a different shore”, A Penguin Book, 1989.
Yamada, Haru, “Different Games, Different Rules” Oxford University Press, 1997